OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	方定煥の翻訳童話研究 : 『サランエ　ソンムル』を中心に
Author(s)	李, 娅炫
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49480
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【２】

氏　　名	李（イ）　妊（ジョン）　炫（ヒョン）
博士の専攻分野の名称	博　士（言語文化学）
学位記番号	第　２２３８９　号
学位授与年月日	平成20年６月25日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 言語文化研究科言語文化学専攻
学位論文名	方定煥（バンジョンファン）の翻訳童話研究ー『サランエ　ソンムル（사랑의선물）』を中心にー
論文審査委員	（主査） 教　授　中　　直一 （副査） 教　授　木村　健治　　准教授　植田　晃次

１．本研究の目的

韓国の児童文学を語る際には必ずといってよいほど方定煥（1889–1931）の名があげられる。彼は韓国近代の児童文学の先駆者として、近代韓国に「童話」というジャンルを定着させようと努めた。1922年7月には翻訳童話集『サランエ　ソンムル（愛の贈り物）』を執筆し当時の韓国の子どもたちに外国の童話を紹介するとともに、翌年の1923年には児童雑誌『オリニ（어린이）』の創刊と編集を実質的に担当し、子どものための雑誌を作ろうと努力した。方定煥の名はもちろん彼の様々な活動は韓国児童文学研究者たちによって欠かさず取り上げられている。しかし、彼の翻訳童話集『サランエ　ソンムル』の収録作品をすべて取り上げて本格的に研究したものはいまだない。方定煥の生前に公刊された唯一の単行本であるこの童話集は、彼が東京留学時代に執筆した翻訳童話集である。彼は近代韓国に「童話」という子どものための文学を定着させようと努め、その初の仕事として童話を翻訳するようになったが、その結晶が他でもないこの『サランエ　ソンムル』である。当時日本で翻訳、出版されていたアンデルセン童話、グリム童話などのなかから世界名作童話10編を拾い出して翻訳し、編集したこの童話集は、彼が留学中の1921年に日本から韓国に送って開闢社で編集し、1922年7月に発行したものである。子ども向けの読み物がほとんどなかった当時の韓国の子どもたちにとってこの１冊がどれほど大きな「愛の贈り物」になったかは想像に難くない。

確かに、当時韓国にはまだ創作童話がほとんどなかった。そのような状況のなかで、すでに彼は外国童話の移入がいかに大事なことか、またその翻訳の仕事がどれほど重要な作業であるのかが分かっていたのである。それゆえ、彼は翻訳童話集の『サランエ　ソンムル』を出版するに至り、また外国童話の紹介の場として『オリニ』を作ることになる。

したがって本研究は、『サランエ　ソンムル』の10編の作品を取り上げ、各々の作品の日本語訳の底本を探し、その底本と彼の翻訳と比較することによって、彼の翻訳の特徴および意義を探ることを目的とする。さらに、方定煥の童話に関する最初の論文とも評価される、1923年1月の『開闢』に発表された「新たに開拓される〈童話〉に関して（새로開拓되는〈童話〉에關하야）」をめぐって、小川未明と秋田雨雀の童話論を中心とし、方定煥の滞日時代の日本の児童文学関係の理論書からの影響関係について考察した。

今述べたように、方定煥の児童文学において翻訳童話が大きな比重を占めることは明白である。したがって方定煥の児童文学における業績について研究するにあたって、彼の翻訳童話に関する研究が必要になる。この仕事は、韓国近代児童文学において、日本からの影響関係を探ることをはじめ、韓国の近代に「童話」という児童文学の領域を定着させようと努めた方定煥の業績を明らかにするという点で大変意義のある作業であると考えられる。

２．方定煥の翻訳童話と童話観（研究結果のまとめ）

以下に方定煥の翻訳童話の原作および底本に関する本論文の筆者の調査、検証の結果をまとめたものを次の表として示す。

表　方定煥の翻訳童話とその底本

タイトル・訳題（本発表者による） 原作国名（方定煥による）	原作者 原作の日本語訳題 （原作刊行年）	底本 （訳者・訳題・掲載の本または雑誌・出版社・出版年）
란파션　難破船 （イタリア）	アミ-チス「難破船」 （1886）	前田晃「難破船」 『クオレ』家庭読書刊行会（1920.6）
산드룽의　류리구두 サンドリヨンのガラスの靴 （フランス）	ペロー「サンドリヨンのガラスの靴」（1697）	楠山正雄 「サンドリヨンの話、またの名ガラスの上靴」 『驢馬の皮』家庭読物刊行会（1920）
왕자와제비　王子と燕 （イギリス）	オスカー・ワイルド「幸福の王子」（1888）	齋藤佐次郎「王子と燕」 『金の船』第2巻第5号，キンノツノ社（1920.5）
요술왕아아　妖術王アア （シチリア）	ラウラ・コンツェンバッハ「アヽ」〔未詳〕	巖谷小波「魔王アヽ」 『世界お伽噺第97編』博文館（1903）
한네레의죽음　ハンネレの死（ドイツ）	ハウプトマン「ハンネレの昇天」（1893）	水谷勝「ハンネレの昇天」 『世界童話宝玉集』冨山房（1919）
어린음악가　小さな音楽家 （フランス）	〔未詳〕	前田晃「失くなったヴァイオリン」 『金の船』第2巻第4号，キンノツノ社（1920.4）
잠자는왕녀　眠りの女王 （ドイツ）	グリム「いばら姫」 （1810）	中島弧島「睡美人」 『グリム御伽噺』冨山房（1916）
텬당가는길일명（도젹왕） 天堂へ行く道　又の名（盗賊王）（ドイツ）	グリム「大盗人」 （1810）	中島弧島「大盗賊」 『グリム御伽噺』冨山房（1916）
마음의꼿　心の花 （未詳）	〔未詳〕	福永友治「心の花」 『おとぎの世界』第3巻第5号，文光堂（1921.5）
꼿속의작은이　花のなかの小人（丁抹）	アンデルセン「バラの花の精」（1839）	濱田廣介「薔薇の小人」 『童話』第2巻第10号，コドモ社（1921.10）
호수의여왕　湖水の女王 （フランス） （『開闢』1922.7-9）	アナトール・フランス「アベイユ」（1883）	楠山正雄「湖水の女王」 『世界童話寶玉集』冨山房（1919）
털보장사　毛深い将士 （イギリス） （『開闢』1922.11）	オスカー・ワイルド「わかままな巨人」 （1888）	楠山正雄「わかままな大男」 『世界童話寶玉集』冨山房（1919）

本論文の筆者は、第2章から第5章にかけて、『サランエ　ソンムル』の目次による作品順ではなく、方定煥の初の翻訳童話である「王子と燕」から次々と作品を選定し、その順に考察を進めたが、表では目次による作品順に整理した。最後の2編は、『開闢』に収められている作品である。

方定煥の翻訳作品の内容の比較分析の結果をまとめてみると、次のような特徴が見て取れる。

第一に、子どもにとってより理解しやすい童話に翻訳されていることである。

第二に、方定煥訳からは原作のキリスト教的な性格がまったく感じられないことである。

第三に、作品を通して読者の子どもたちに「人への信頼」「家族愛」「人情味」「正直さ」などを強調し、温かい人間世界を見せようとした点である。

第四に、読者が子どもであるだけに残酷な場面や残虐な部分を削除したり、書き変えを行っている点である。

最後に、文体面の特徴としては、子どもを念頭において、子どもが読みやすいように全文をハングルで表記し、漢字はすべて括弧のなかに入れるという工夫をしたことがあげられる。さらに、子どもを尊重し、子どもに敬語を使おうとした天道教の方針に沿って、翻訳童話のなかでも丁寧な文末表現を用いた。このような文末表現を広めるために、方定煥は童話口演だけでなく童話翻訳においても努力を払ったのである。また、童話口演の際にみられる口語的な文体が多々みられるのも彼の翻訳童話の特徴としてあげられる。

以上のように、方定煥の翻訳作品の翻訳方法が確認できた。ここには、ある程度の一貫性が見受けられ、翻訳童話における方定煥の童話観が窺える。

本論文の第6章では、方定煥の童話に関する論文「新たに開拓される〈童話〉に関して」について考察した。方定煥の童話論に関するテキストを分析した結果、巌谷小波の「お伽噺」と鈴木三重吉の「童話」とで対立していた日本の大正時代の児童文学が、方定煥によって融合されていることが分かった。

しかし、小波や三重吉の影響にとどまらず、そこには高木敏雄の『童話の研究』、また、小川未明や秋田雨雀の童話論、そして、童話研究雑誌『童話研究』からの踏襲や彼らの童話観からの影響も大いにみられた。「童話は決して子供だけのものでない、童心をもつすべての人のための文学である」との未明の童話観に、「我々は一生を通してもっぱらこの童話の世界のみで児童と大人が一つになることができ、またこの世界でのみ大人の魂と児童の魂の間に差別がなくなる」、さらに、「人類の持っている『永遠の児童性』のために童話を書くべきである」という雨雀の童話観を加えて、自分の童話観を作り出していったのである。

方定煥のこの論は当時としてはもっとも詳しい童話論であって、童話についての彼の知識や考え方を垣間見ることができる非常に重要な資料である。しかし、日本の児童文学の影響が当然で避けられないことであったとしても、高木や小川未明、秋田雨雀の童話論、さらに、『童話研究』の一部をそのまま翻訳していることにその限界を感じざるをえない。

しかし、上述の新たに作り上げた方定煥自身の童話観から、子どもの頃の純粋な心を忘れ、世間に汚れていく大人の心に童話という光を射し込ませ、救い出そうとした痕跡が見て取れる。その方法として彼は、ただただ童話に接すること、すなわち、童話を書くこと、そして、童話を読むことを一番に強調している。そこに、天道教思想にみられる「地上天国」を見ようとしたのではないだろうか。日本の童話論や童話観の影響を強く受けていることは言うまでもない事実であるが、このように大人と子どもが一つになれる童話の世界を「地上天国」のようなものとして作り上げようとした点をみると、彼の童話観にやはり天道教の思想の影響があったとみられるのである。

以上のように、方定煥は日本の童話や日本の童話論、さらに、日本の童話観をもそのまま吸収し韓国に持ち帰った。本論文では、方定煥の翻訳童話のなかでも1922年までに翻訳された作品に限定し分析した結果、これらの翻訳童話にはある程度の一貫性が見受けられ、翻訳童話における方定煥の童話観が窺えることを明らかにした。さらに、その1年後に発表された童話に関する論文「新たに開拓される〈童話〉に関して」からは当時の日本の童話理論の影響が大いにみられるものの、方定煥なりの童話観が形成されていることが窺える。彼の心のなかにもともと潜んでいた童話に関する考えと日本の童話観がある程度一致し、それに共感できたからこそそのようなことが可能であったと考えられる。そこに子どもに対する彼の愛情や彼の思想の基になる天道教の人間平等思想が一つになって、方定煥の童話論、すなわち、童話観が形成されたのであろう。

童話の翻訳作業と童話論の発表の時期の順番からみて、このような童話論に表れた彼の童話観と『サランエ　ソンムル』をはじめとする彼の翻訳童話作品との直接的な関係を明示することは困難であるものの、何らかの形で作品のなかに表れていることは間違いない。それは、童話翻訳の仕事をする前から、日本の童話理論の影響を受ける前から、彼のなかに存在していた子どもへの愛情というものがもっとも大きなものであったといえるだろう。

3．方定煥の翻訳童話の児童文学史的意味

方定煥は来日してから1年程度で『サランエ　ソンムル』をはじめ『天道教会月報』や『開闢』に10編以上の作品を翻訳、発表する。そればかりか単行本『サランエ　ソンムル』の編集や出版にも関与する。ただ1年にしてそれほどのことを成し遂げるにはあらゆる面において相当の能力が必要とされたであろう。そこにはまず、翻訳作業の基本になる外国語能力(つまり日本語能力)や文章力が必要とされる。しかし、それは単純な外国語能力や文章力だけで容易にできることではない。上述したように、これらの作品は1冊の本から選び出して翻訳したものではなく、様々な雑誌や単行本のなかから丁寧に1編ずつ選定されて、作り上げられたからである。さらに、『サランエ　ソンムル』には全部で14点の挿絵が添えられており、そのすべての挿絵にも彼なりの工夫が払われている。方定煥は、装丁の作業における絵の統一性をまず考え、すべての挿絵に岡本帰一の絵を取り入れることになる。その際彼は、まったく関係のない童話からも各場面に合うような絵を探し出して、取り入れるという工夫をした。このような仕事を1年で可能とするには相当な努力と情熱が必要であったことであろう。

方定煥の来日の際に、あちらこちらにあふれていた、色鮮やかで芸術性の高い多くの挿絵が盛り込まれていた日本の雑誌や童話集をみて、読み物がほとんどなかった韓国の子どもたちにもなるべく多くの童話を、様々な国の童話を与えようと努力し、子どもたちに素敵なソンムル(贈り物)にしようと試みた結晶がほかでもない『サランエ　ソンムル』なのである。この1冊には方定煥の韓国の子どもへの愛情だけではなく、彼の汗や涙が深く染み込んでいるのである。

『サランエ　ソンムル』が、1920年代の韓国の児童文学界から現代の児童文学へ示唆するものは大きい。1冊の子どものための本が作られるまでにはいかなる努力が必要であるかを方定煥は1世紀を通して示唆しているのである。さらに、この1冊の単行本は1世紀もさかのぼる日韓の児童文学の歴史のうえで、その影響関係を探ることができる貴重な資料でもある。

論文審査の結果の要旨

本研究は、韓国近代の児童文学の先駆者である方定煥が、東京留学時代に執筆した翻訳童話集『サランエ・ソンムル』の翻訳原典となった日本語訳を調査し、方定煥の翻訳童話の特質を明らかにすると同時に、彼の童話論の背景には日本人研究者や童話作家の童話理論が存在していたことを明らかにしたものである。

『サランエ・ソンムル』のみに焦点をあてた研究は従来なかったが、李妊炫氏はそこに収められた全１０編の翻訳童話を詳細に調査し、その全てに関して底本となった日本語訳をつきとめ、方定煥訳がそれらからの重訳であることを文献面で明らかにしている。その際李妊炫氏は方定煥が作品内容に応じて、日本語訳を改変することなくほとんど忠実に韓国語に翻訳したものから、日本語訳に対してかなり改変の手を加えたものまで、様々なレヴェルの翻訳があったことを論証している。そして改変の手を加えた際の背景として、子供に理解されやすい形にしたこと、キリスト教的要素を排除したこと、残酷な情景描写を排除したこと等を挙げている。李妊炫氏はまた、童話理論の面においても、方定煥が高木敏雄や小川未明、秋田雨雀等の影響を受けていることを、文献の面から実証している。

李妊炫氏の研究は、先行研究では解明されていなかった方定煥訳の底本を確定した上で、さらに彼がどの部分で創作的な改変を行ったのかを実証的に論じたものであり、その着実な研究手腕は極めて高く評価される。また論旨は明快で、日本語による表現も高い水準を示している。強いて難をいえば、日本語訳の底本となった欧語原典への言及が若干少ないこと、また童話論の部分では方定煥の独創性が見えにくい論述になっている等の点が挙げられるが、論文全体としては方定煥の童話翻訳の手法やその背景にある思想が非常に明確に示されており、文献調査の手堅さと相まって、本研究が極めて高い水準にあることを示している。

以上の理由により、本論文は博士（言語文化学）の学位論文として十分に価値のあるものと認められる。